る門琵琶合奏にて目出度く午後五時三十分大成功裡に閉会した。舞台上で記念撮影後パーティを催し、関係者の慰労がされ、午後七時過ぎ散会した。（J・K・L生）

日本琵琶悠絃会六月例会

六月二十八日(日)昼東京中野区大和町地域センター。門琵琶合奏！山崎旭幽、八束一峰▼小野訓導！（録音）喜多村一城▼菅公！木村香詠▼小曲敦盛！錦幽▼涙の子守唄！吾妻江雪▼乃木将軍！金尾洲丈▼涛陽江(下)！一峰▼旅順開城！田戸桜丸▼秋海棠！坂入晴峰▼鉢の木！青木早水▼伊豆の御難！中村洲心▼湯島の白梅！長谷川錦舟▼蚓蛾！西村暠俊。外に伴旭友、天羽岳水、三上成水、飯島国昭の四氏来賓列席。五時半散会。

ものがたり琵琶演奏会

七月十一日(土)午後三時東京虎の門発明会館ホール、主催雅俊後援会（会長酒井繁雄氏）、後援晴風会ほか（有料）。白虎隊！杉山富士代▼敦盛！杉山旗水▼新選組！渡辺声水▼小栗栖！金森旭弾▼城山！仲川秀邦▼茨木！押川旭葉▼八甲田山！友吉鶴心▼小野訓導！座間燦水▼湖水乗切！山下晴楓▼曲垣平九郎！都錦穂▼物語琵琶青山播磨！会主杉山雅俊▼柳の精！若宮旭登▼西郷隆盛！中谷襄水。

定例研究会

七月十二日(日)昼東京新宿洲鳳会館、主催日本琵琶楽協会（有料）。重衡！末吉希水▼誉れの水馬！伴旭友▼吉野落！本橋仙舟▼青葉の笛！山下旭瑞▼富樫の涙！石田脩水▼敦盛！田中光水▼講評独協大教授平野謙次先生。

京都琵琶協会七月例会

七月十二日(日)昼本部平井会長宅、三時から洛北貴船の料亭右源太にて懇親会（次号詳報）

京都千本釈迦堂陶器祭に琵琶奉納

七月十二日(日)昼大阪琵琶同好会協賛（次号詳報）

京都祇園祭協賛琵琶演奏会

七月二十三日(木)夕五時京都東山安井神社納楽堂、京都琵琶協会協賛。（次号詳報）

大阪安井天満宮琵琶献奏

七月二十五日(土)朝十時大阪琵琶同好会協賛（次号詳報）

東西交流一泊弾交房総一周旅行

七月二十六、七両日千葉県安房郡小湊町鯛の浦ニューこみなとホール、鶴絃会・四明会・正絃会共催。（次号詳報）

ラヂオ琵琶放送

七月九日(木)午後三時十分NHK・FM。田中光水氏「竜の口」放送。

（予　告）

○：京都琵琶協会八月例会　八月三十日(日)昼二時本部平井会長宅。

○：堺大寺開口神社秋祭に琵琶献奏　九月十三日(日)昼一時、大阪琵琶同好会協賛。

昭和五十六年八月一日発行（非売品）
編集者　植村寞水
発行所　京絃社
吹田市山田東一丁目
〒565
千里台スカイハイツB棟六一四号
電話〇六（八七五）〇三二六番

暑中御見舞

錦心流琵琶　植村寞水

きがとあ

うっとうしい一ケ月あまりの梅雨期がようよう過ぎて暑い夏が訪づれた●夏は暑い、冬は寒いというのはあたりまえのことで、暑さ寒さの間に暮らしよい春と秋とを神様は我々に与えて下さる、有難いことである●暑中交礼のお申し込みを沢山頂いて紙面を飾ることが出来嬉しく思っている●一応お申し込みの順に掲載させて頂いたが万一不備の点があらばお許し願いたい●郵便物の配達が兎角おくれ勝ちのため締切後に到着の分は九月号に「残暑見舞」として載せさせて頂く、不悪御寛容下さい。

琵琶機関紙　京絃　第三二六号　京絃社

井伊大老と安政の大獄（四）

ばくすい

安政の大獄は、どの方面に対しても苛酷であったが、幕府の憎しみの最も深くその圧迫の最も強かったのは、水戸藩に対してであった。これに激発されて水戸の志士は、ひそかに連絡して時機をうかがい、万延元年（一八六〇）三月三日朝、降りしきる雪中に登城せんとする井伊大老を桜田門外に要撃してこれを斬りその首を挙げた。攻撃したのは関鉄之助をはじめ水戸藩士十七名、それに薩摩藩の有村治左衛門が加わっていた。彦根藩士六十数名はよく防戦したが、戦は一瞬の内におわった。

井伊大老暗殺の影響は甚大で、安政の大獄以前に於いては、国事を憂うる人々も大抵は徳川幕府を助け、これを改革して行かんと考えていたが、安政大獄以後は倒幕を考えるようになった。水野筑後守が「橋本景岳の殺されたるの一事、以て徳川幕府を亡ぼすに足る」と云ったのはその一例である。然し二百数十年累積された徳川幕府の威力は、そう簡単には倒せなかった。

井伊は彦根三十五万石の藩主であり、幕府の高級幕僚を自任する溜間（たまりのま）詰めの筆頭で、大老として将軍の代行でその権力の前には靡かぬ草は無いかの如き勢いであったのに、白昼堂々と行列を従えながら江戸城の玄関桜田門外で倒れた。ここに於て憂国の士は倒幕可能の自信を得たのである。井伊は幕府の権威を高め、その政権を永久ならしめんとして専断、弾圧をほしいままにしたのであるが、結果は幕府の寿命を縮めることになった。

但し井伊が倒れて後、幕府が終りを告げるまでには尚七年の歳月があった。この間、幕府はその存続のために可能な限りの努力をした。桜田門事件の責任者として金子孫二郎、高橋多一郎らを死に至らしめたのもその一例で、朝廷との対立緩和のために孝明天皇の妹和宮（かづのみや）の将軍家茂への降嫁を願って勅許を仰いだのも同様である。

これらの政策は老中安藤対馬守を中心として進められたので、志士はこれに反撥して文久二年（一八六二）正月十五日、安藤を坂下門外に襲撃したが、安藤は井伊の前例に懲りて充分警戒していたので、背に一刀を受けたのみで助かり、水戸の平山兵介、下野の河野顕三ら六人の志士は総て殺された。志士達が尊敬していたのは大橋訥庵（とつあん）であったために、幕府は坂下門の変の直前に訥庵を獄に投じたが、間もなく病死した。斯様な状勢の下に安藤も信望を失って老中職を辞し、幕府の権威はいよいよ失われた。

之に反比例して長州の毛利、薩摩の島津の二雄藩が頭をもたげて来た。長州藩は朝廷（公）と幕府（武）との対立をやわらげ、いわゆる公武一和して開国進取の策を立てんとする長井雅楽の案によって動こうとし、幕府も之を歓迎したが藩内の志士は喜ばず失敗した。薩摩では島津久光も公武合体の方針で長州に代って動き、強硬に討幕を主張する有馬新七らを、四月二十三日伏見寺田屋に襲撃し多くの死傷者を出したが、島津の方針は幕府を改造して朝廷の考えを奉戴させようとするもので、島津は上京して朝廷にこれを建白した。朝廷は大原重徳を勅使とし、島津はこれを護衛して江戸に下った。即ち一橋慶喜を将軍の後見職とし、松平慶永を政事総裁職として、実質的には「大老とせよ」との命令で、幕府

は渋々これを承諾した。安政五年に井伊直弼に反対して処分を受けた人々が、いま文久二年には幕府の中心に立ってその指揮をとることになった。つまり朝廷の一機関となった訳で、二百数十年間一切を独断専行し朝廷を無視して来た幕府の力は、これで失ったのである。

〝敵は本能寺〟（中）

高橋邦次

明智日向守光秀は―

〈二十六日〉　中国出陣の準備と称して居城の丹波亀山城（亀岡市）にもどった。

〈二十七日〉　出陣祈願と称して愛宕山へ参拝、ひそかに神前でクジを二度引き〝大吉〟と出て大喜びする。側近たちも〝毛利必滅〟の卦（け）と信じ喜びを共にした。

〈二十八日〉　城内で連歌の会を催し、光秀はつぎの句をつくった。

ときは今、あめが下知る五月かな

明智の先祖は土岐（とき）氏。五月の今こそ明智が天下を治める時が来た―と、ひそかに決意をうたったものだが、まだ誰も気づいていない。

〈二十九日〉　午後六時、明智軍計一万二千人が城をあとに出発する。

光秀の本能寺攻撃計画は慎重そのものだ。出発に際しても「信長公の命により、明智出陣の陣容を御覧に入れることになった」と全軍に嘘をついた。中国路へ向わず、京都路へ進むための口実である。そして出発後、はじめて五人の一族重臣に〝本能寺襲撃〟を打ち明け「お前たちが同意しなくてもいい、私一人で本能寺へ乱入、切腹する」と不動の決意を示し「殿がそこまで御決心なれば…」と五人を同意させる。

光秀は全軍を三隊に分けた。第一隊は亀岡→老の坂のコース。第二、第三の連続攻撃で本能寺を必滅する作戦だ。光秀は桂川まで来たとき、はじめて全軍に〝敵は本能寺（信長）にあり〟と告げた。もう各将兵もここまで来れば後えは引けない―。

天正十年（一五八三）六月二日払暁、本能寺の織田信長は、トキの声と銃声で飛び起きた。「明智どの御謀反」。森蘭丸の危報を聞いた信長は「是非に及ばぬ」と答えている。

信長は最初欄干上で弓を引いて応戦したが、敵の槍に腕を刺され、室内へ退いて戸を閉めた。敵将の一人が戸を押しあけた時、屋内に血まみれの手や顔を洗い、手拭いでぬぐう信長の落ちついた姿が見えた。一人がその背中へ一矢をむくいた。信長はその矢を引抜き、勇気をふるいながら飛び出したが、また腕を銃弾で撃たれ室内へ引返した。そして腹かき切って切腹した。

光秀軍はその足で信長の長子信忠が籠る二條城を襲った。この二條城はさきに信長が十五代将軍義昭のために建てた城で、義昭追放後は正親町天皇の皇太子の御所になっていた。信忠は皇族を避難させたあと勇敢に戦って自害した。光秀も皇族の避難を待った上で攻撃、同城を焼き払った（信長公記フロイヅ年報）。

光秀は何故主君を殺害したのか、私怨、性格、野心説などあって真相は不詳である。彼は信長よりも七つ年長だった。十五代将軍足利義昭を信長に取りもった縁で、四十一才のとき信長に仕えた。しかし〝私怨説〟によると、信長は義昭を追放後、事あるたびに光秀をいじめ抜いた。信長の違約によって、光秀の母が殺されたのもその一因である。それは先に光秀が信長の命令で難攻不落の丹波八上城を攻めたとき、光秀は自分の母と城主の波多野秀治兄弟を〝交換人質〟にすることで八上城を帰順させた。処が信長は生命を保障する約束を無視して波多野兄弟を処刑したので、光秀の母も城中で殺された。

このほか、難くせをつけて家康饗応役の光秀を免じたり、光秀の後輩にあたる羽柴秀吉の下で中国出陣を命じたり…。こうしたことから光秀は信長殺しの機会を狙っていた。

しかし信長の違約で殺されたのは光秀の義母である。高山右近、筒井順慶らの大名も同時に中国出陣を命じられている。羽柴秀吉も

信長からは「小ザル、小ザル」と軽蔑され、衆目の前でなぐられもした。石山本願寺の攻撃が長びいたという理由だけで、永久追放された佐久間信盛などは、光秀よりも過酷な仕打ちを受けている。常に冷静で知性な光秀が、単なる恨みで主君を殺害する筈がない。

六・二事件決行の前、光秀は「織田家へ参りて十七年、恩顧譜代というにあらず、ただ鎗先を以て今日あり」と部下に語っていた。信長の腹臣羽柴秀吉らは中国遠征中だ。信長の強将柴田勝家らも上杉合戦で北国に居る。信長はガラ明きの京都に、家臣百余人を連れた〝浴衣〟がけで泊っている。この絶好の機会を逃がしては永遠に天下を取る時は来ない―と光秀は判断したのであろう。

主君殺しについても彼はこう考えたであろう。「下剋上とは戦国時代の常道である。これを背徳というのなら、将軍義昭を永久追放し、その後ガマに座ろうとする信長こそ背徳の第一人者ではないか。寧ろ信長を倒すことこそ義昭の縁故を受けた自分の義務であり、それが将軍家に対する忠誠であると―」。事実、信長殺しの二日後、彼は安芸の小早川隆景宛ての親書で次ぎのように書いている。

「ついに将軍義昭の意を体して逆臣信長を討てり。」

本能寺の変のあと光秀は安土城攻略に向った。途中大津勢多城主山岡景隆に謀反を勧めるが、山岡は拒否して瀬多大橋と城を焼いて逃げる。安土城の留守部隊も合戦をさけて撤兵した。光秀軍を恐れたのではない。合戦によって室町芸術の結晶たる安土城が焼亡すること恐れたのだ。六月五日光秀軍は無血入城し、保管中の財宝を押収処分した。

このあと光秀は守護部隊を残して京へ引上げ、京都全市に戒厳令を敷いた。直ちに朝廷工作を始める一方、友人の細川忠興に謀反参加を呼びかける。忠興は光秀の娘婿で綴喜郡田辺城主だった。忠興と父幽斉は謀反の結末を冷静に見透してこれを断った。更に近江日野の蒲生城主も光秀の要請を拒否したので、光秀は次第にあせり出した。

忠臣楠正成公を偲ぶ

辻旭城

建武三年（一三三六）足利尊氏が京都に幕府を開くと、間もなく朝廷は南北二つに分裂して、尊氏の横暴により両朝の争いとなった。

〝歌書よりも軍書に悲し吉野山〟と歌われているように、南朝哀史の跡と源義経哀史の跡がそこかしこにある。山麓の吉野神宮は後醍醐天皇を祭るが創建は明治になってからで、吉野山では歴史が一番浅いところである。

このころ京の南朝後醍醐から、北朝の尊氏追討の命を受けた楠正成は、河内赤坂から大阪四天王寺に進出した。天王寺を中心に堺あたりは両軍の重要な争奪地点で、北畠顯家は阿倍野でしばしば戦い、ついに泉州堺附近の石津で戦死した。正成は南北朝の雌雄を決する合戦を兵庫楠寺で行った。むかしは今の湊川附近まで境内がひろまっていて、延元元年（一三三六）武運つたなく正成以下一族たちは悉く自刃した。

以上が楠氏の俗説であるが、起草してみると楠正成ほど不明の多い武将はいない、いったい何年ごろ何処で生まれたのか、父母は誰なのか、またどういう家系なのか、すべてが不明なのである。

謎はさまざまな異説を生む、正成びいきの〝太平記〟によると「コレハ（正成は）敏達天皇四代の孫、井手左大臣橘諸兄公ノ後胤タリ：略：ソレ母若カリシ時、志貴ノ毘沙多ニ百日詣デテ夢想ヲ感ジテ設ケタル子ニテ、幼名ヲ多聞トハ申シ候也…」。とあるが、勿論伝説であろう。現在判っているのは。河内国の悪党あがりの土豪が、南北朝の争いから慧星の如く日本歴史の真っ只中に踊り出で、わずか数百の眇たる野武士で、精鋭天下に誇る鎌倉三十余万の大軍に拮抗して散々に打破り、そして忽然と消えていったことぐらいであろう。

正成が史上にあらわれる期間は極めて短かい。元弘元年（一三三一）から延元元年の湊川合戦まで五年の間に過ぎない。その五年の間の正成戦術は、前に述べた悪党の戦闘法である。戦法は正規軍の常識を破った瓢悍で軽

快な奇兵のゲリラ戦術である。〝太平記〟によるとー赤坂ノ城ニ押シ寄セタ鎌倉軍三十万余ハ豆粒ホドノ城ノ構エヲアザケリワラッテ、アナアワレナ有様ヤ、コレホドノ小城片手ニツカンデ投ゲラレヨウ、アワレセメテ一日楠コラエヨウカシ、サラズバ功名ガ立テラレヨウ、とみなみな馬からとびおり、堀を越えて押し寄せたり…。

こうして騎馬戦法に長じた鎌倉軍を南河内の山間、赤坂におびき寄せることに成功した正成は、彼等にその唯一の利益であるところの馬を捨てさせてしまう。

まんまと正成の掌にのせられた坂東武者たちは、われ先きにと堀を越え堀際に迫った。その途端、城の櫓、狭間から隙間もなく射放つ数多くの矢を浴び、たちどころに千余人の将兵が落命する。命からがら一旦退却した鎌倉勢は、山麓に野陣を張って休息していると、俄かに四方の山ひだから湧くが如く出現した楠勢の伏兵が、どっとばかりに襲いかかった。この奇襲に次ぐ奇襲を受けて力攻めをあきらめた鎌倉軍は長囲の計をとった。ところが正成の戦術は敵に休息を与えない。夜はどこからともなく陣鉦が鳴り響き、今にも猛攻の気配をみせ、おちおち眠る間もない。敵を不安のどん底に叩き込むという一種の神経戦術である。こんな状態が毎夜続いてはたまらない。

鎌倉軍は夜明けと共に城攻めを敢行、逆茂木を引分け堀を越えて漸く塀にとりついた途端、塀諸共堀に転落しその頭上から大石や大木が降って来る。続いて決死の武者が楯をかざして寄せくれば、城からは熱湯や煮えた糞尿を浴びせかける。かくて鎌倉勢は兵庫を指して敗走した。

これを追って延元元年五月二十五日、正成は七百余騎を率いて湊川に布陣した。湊川では足利軍が雲霞の如く対陣、正成は決死で突入して戦闘十数時間、遂に刀折れ矢つき一族十数人、郎党五十余名と共に自刃したのである。

琵琶歌中の詩吟・和歌朗詠考（一〇）

編集部

（琵琶歌ー）

広瀬武夫

正気歌

鞠躬唯応酬至尊
慷慨就義日本魂
三代忠勇楠子門
従容就刑小塚原
遺烈千年見鏃痕
詞存忠愛不知冤
一気磅礴万古存
嗚呼正気畢竟在誠字
誠哉誠哉斃不已
死生有命不足論
奮躍赴難不辞死
一世義烈赤穂里
憂憤投身薩摩海
或為芳野廟前壁
或為菅家筑紫月
可見正気満乾坤
七生人間報国恩
きくしそんにむくゆべしふんやくなんにおもむきてしをじせず　こうがいぎにつくにっぽんだましい　いつせいのぎれっあかほのさと　さんだいのちうめうなんしのもん　いうふんみをとうずさつまのうみ　しようようけいにつくこづかがはら　あるいはよしのびようぜんのかべとなり　いれつせんねんぞくこんをみる　あるいはかんけつくしのつきとなり　ことばちうあいをそんしてえんをしらず　みるべしせいきのけんこんにみつるを　いっきほうはくばんこにそんす　ああせいきひっきようせいのじにあり　どどなんぞかならずしもたげんをようせん　せいなるかなせいなるかなたおれてやまず　ななたびにんげんにうまれてこくおんにむくいん。

鞠射＝力を尽すこと。薩摩海＝西郷が月照と共に月夜薩摩潟に投身した。小塚原＝文政疑獄に沢山の勤王志士が処刑された所。芳野廟前＝吉野如意輪堂の壁。菅家＝菅原道真公。磅礴＝充ちふさがる、あふれる。嗾々＝多く云う青葉の様。

（大意）死するも生きるも之れ誠に天命であって彼れ是れ云うべきではない。我等臣民は只々慎んで至尊の御恩に報ゆべきである。国難あらば奮起活躍して死を厭わず、慷慨気を以て正義のために起つのが日本魂であり正気である。赤穂四十七士の行為は一世の義烈であり、楠氏三代は忠勇の二字に尽きる。国事を憤って薩摩の海に投身した隆盛、月照の

心事も従容として取り乱さず、小塚原に刑死した吉田松陰等の心持ちも皆日本魂即ち正気である。或いは吉野如意輪堂の壁に楠正行が鏃で刻んだ三十一文字の痕は千年の後までも消えない。筑紫の月に対し菅公が賦せる詩ともなり、詞忠愛の至情を尽くして冤罪なりとて君を怨む心は少しもない。斯の如く先人の日本魂の発露を見ても実に正気は天地に満ちて居り、日本魂即ち正気は大昔から我々先祖から充分伝承された所である。嗚呼考えれば正気とは誠にあり兎や角説明を要しない。万事誠を以て進み斃れて己まぬ意気であり、七度人間に生まれ来て国恩に報ゆる決心である。

川中島

栗田亘

上杉謙信、武田信玄の川中島での一騎打ち、あれは事実ではないという。その合戦で武田方がとったキツツキの戦法。上杉勢が採用した車がかりの戦法。ともに帝国陸軍が兵法の手本として教材にした。が、これも史実ではないという。

「敵に塩を送る」。今川氏によって塩の輸送を断られた信玄に、謙信が塩を送った故事。しかし確かな記録はないという。

謙信が晩年に作ったとされる漢詩〝霜は軍営に満ちて秋気清し〟名作だが、後世の別人の筆に違いないという。

何人かの専門家の研究者が、そう口をそろえた。

なにより川中島の戦いは、名高いだけで歴史的な意味はない、という。これっぽっちも時代を動かさなかった、という、信濃（長野県）を舞台に借りた、甲斐（山梨県＝武田）と越後（新潟県）の国境紛争に過ぎない、ともいう。

ただし、ないないづくしの中で、「あった」と云い切れる事実はある。川中島の戦いと呼ばれる戦争が、織田時代の天文二十二年（一五五三）から永録七年（一五六四）にかけて、合わせて五回あったこと。とりわけ永録四年（一五六一）の四回目の戦いが大激戦であった。両将の一騎討ちをはじめ幾多の俗説を生んだこと。そして繰返し戦場にされた信濃の人たちが、いいつくせぬ辛酸をなめたことである。

いまの佐久市にあった志賀城が落ちると、男は皆殺しにされ、女子供は競売に附された。

上田市の郊外にあった塩田城が落ちると、周辺の女、子供、老人は容赦なく生け捕りにされた。以後どうなったかは不明だが、前代未聞のこと、と生け捕りにした武田側の記録にある。

戦いから三十年ほどたって、川中島で検地がおこなわれた。現存する検地帳には、行方不明の〝失せ人〟主のいない〝明き屋〟の文字が並び、全体の三分の二に及んでいる。

戦いから二百年前後たった江戸中期、上田盆地の小川村では、村内の一軒一軒が幕府領と小諸藩領に細かく分割されていた。隣同志であっても、領主が異なり、所属する寺が違った。川中島時代に村に入ってきて定住した占領軍と、昔からの住民の別が、この時期も尾を引いていたのではないか、と見られている。

戦いから四百年以上たった現在でも、戦禍の跡は、ある。

名字である。

その集落は、武田軍に踏みにじられた。いま、家々の表札を見てあるくと、Aさん、Bさん、Cさん、すべて、山梨県内の地名がそのまま名字になっている。それ以外の名前はない。

勝った武田勢は、この土地の住民を総入れかえしたらしい。占領軍及び甲斐から連れてきた人々を新たに住まわせ、もとの住民を連れ去った。強制連行された人たちがどうなったかは全くわからない。（朝日新聞から。）

▼合戦五回　いづれも引き分け

武田信玄の侵攻によって、信濃の豪族たちは敗走し、上杉謙信に救援を求めた、これがきっかけで合戦が始まる。五回の戦いそのものは何れもほぼ引き分けに終ったが、信玄はじりじりと版図を広げ信濃を制した。主戦場となった川中島は、長野市郊外の千曲川と犀川にはさまれた三角地域附近の総称。現在は水田、果樹園、畑が広がり、長野市のベッドタウンでもある。

舞見御中暑

大阪中央部旭会
北中旭蝶
〒671－20 姫路市花田町高木一八ノ四
電話〇七九二（二三）七一九五番

錦堂派
大井錦淀
〒369－12 埼玉県大里郡寄居町大字寄居五五八
電話〇四八五（八一）一七四〇番

筑前琵琶
大阪中央部旭会長
塩谷旭洲
〒535 大阪市旭区中宮四ノ一二ノ一四
電話〇六（九五一）九二九四番

武田恒水
〒420 静岡市丸山町八七

錦心流琵琶
一水会大阪支部
会員一同
〒606 京都市左京区下鴨蓼倉町一六
馬場鴨水方
電話〇七五（七八一）三〇五〇番

一水会京都支部
会員一同
〒580 松原市柴垣一ノ一九ノ二七
中山鳳水方
電話〇七二三（三二）一一九〇番

琵琶詩吟蓮水会
一水会神戸支部
〒662 事務所 西宮市羽衣町七ノ二九
電話〇七九八（三三）五八八七番

顧問 佐藤光司郎
蓮水会長 三浦蓮水
支部長
副会長 楊獄水
副支部長
理事 反町紫水
〃 田川蘭水
女流 生島華水
〃 川上琵水
〃 吉田秋水
〃 （舎山改め）瓜生瞳水
山下博水
村上湧水
女流 木の宮梅水
〃 田中珠水
〃 高原柳水
〃 滝沢花水

詩吟部一同

舞見御中暑

横須賀琵琶連盟会長
山田幻水
〒237 横須賀市船越町一ノ五〇
電話（六一）三六七六番

錦心流一水会秋田支部長
星野巌水
〒011 秋田市土崎港中央四丁目九ノ二六
電話〇一八八（四六）三三三四番

薩摩琵琶
仲川秀邦（旭明）
〒164 東京都中野区本町三ノ二ノ二
新都ハイツ二〇五
電話〇三（三七五）一八四七番

錦心流琵琶一水会本部
顧問 飴谷六水
〒167 東京都杉並区成田東三ノ三一ノ八
電話〇三（三一一）四五八六番

桜井旭会会長
秋元旭晨
〒618 大阪府三島郡島本町桜井四ノ一八ノ一〇
電話〇七五（九六一）五〇四三番

筑前琵琶橘会
押川旭葉
〒250－04 神奈川県足柄下郡箱根町強羅一三〇〇番地
電話〇四六〇（二）二一一二番

京都琵琶協会
〒603 京都市北区平野宮西町六四
平井方
電話〇七五（四六二）一四二三番
会長 平井春嶺

賛助会員 楊光子
〃 高橋正雄

馬場鴨水
林田城水
林川磯水
西倉旭水
戸田旭水
戸中旭水
田村寛水
楊原秋水
植原獄水
田吹旭水
梅村旭水
矢岡旭水
安住美旭水
山津公水
牧康嶺水
荒清濤水
木水水水
下水水水
本水水水
井内媛水
岸港旭水
桜皇旭水
水南旭水
内旭水

舞見御中暑

戸倉旭嶺
〒520
大津市中央一丁目一番十号
電話〇七七五（二四）五〇六五番

西川磯水
〒522
彦根市芹橋一ー二ノ三六
電話〇七四九（二二）六七五九番

日本琵琶楽協会参与
愛媛琵琶連盟顧問
佐藤晃絃
〒790
松山市立花三丁目五ノ六
電話〇八九九（四一）三八八七番

筑前琵琶橘会
法香久院
荒木旭媛
〒606
京都市左京区岡崎徳成町二五
電話〇七五（七七一）四〇一六番

薩摩琵琶四明会
京都琵琶協会
日本琵琶楽協会
平井春嶺
〒603
京都市北区平野宮西町六四
電話〇七五（四六二）一四二三番

小野鶴彦
〒431－31
浜松市積志町一八三一
電話〇五三四（三四）〇八七一番

吟詠琵琶赤心流
家元
赤心流鶴翁
〒420
静岡市西草深町二十一番二十号
電話〇五四二（五三）一四七一番

舞見御中暑

吉井良三
〒567
茨木市新郡山二丁目一ノ一〇七
電話〇七二六（四一）二八一六番

錦心流琵琶教授
鳳水会
中山鳳水
〒580
松原市柴垣一ノ一九ノ二七
電話〇七二三（三二）一一九〇番

金森旭弾
〒270－01
流山市東初石二丁目一三一ノ六
電話〇四七一（五五）〇一八一番

鈴木誉士
〒176
東京都練馬区豊玉北五ノ一一
芸の友社
電話〇三（九九一）〇三六三番

筑前琵琶旭会
西川旭操
〒670
姫路市田寺池の内八四二ノ八
電話〇七九二（九六）三八四四番

梅原旭濤
〒617
京都市向日市鶏冠井町山端二
電話〇七五（九三一）四五一二番（専用）

筑前琵琶橘会宗範
山崎旭萃

大和流琵吟家元
山崎光掾
〒569
高槻市宮田町一ノ六ノ五
電話〇七二六（九三）三一五九番

舞見御中暑

錦心流琵琶書道
馬場鴨水
〒606 京都市左京区下鴨蓼倉町一六
電話〇七五（七八一）三〇五〇番

錦心流琵琶一水会
琵琶を楽しむ会
田中歉水（けん）
〒658 神戸市東灘区御影中町一ノ一四ノ一五
電話〇七八（八五一）一二六三番

薩摩琵琶錦水会
正絃会・四明会会員
岡部錦蝶
〒359 埼玉県所沢市中新井二ノ二八一ノ四
電話〇四二九（四三）〇九二八番

日本芸術琵琶
普絃会々員一同
〒150 東京都渋谷区恵比寿南三ー七ノ六
青木早水方
電話（七一三）一二七七番

琵琶一水会神戸副支部長
琵琶蓮水会副会長
楊嶽水
〒662 西宮市松園町十三番二十一号
電話〇七九八（二二）八二〇八番

筑前琵琶総師範
法汪山
藤巻旭鴻
〒171 東京都豊島区高松三ノ一二
電話〇三（九五五）三六四五番

筑前琵琶日本旭会
範司
押田旭窈
筑前琵琶紅会
〒160 東京都新宿区三栄町十六
電話〇三（三五一）四五九一番

舞見御中暑

琵琶芸術協会代表
四絃富士会顧問
錦心流琵琶秋声会々長
前田秋聲
〒141 東京都品川区西五反田四ノ八ノ一二
電話〇三（四九一）八三三二番

京都琵琶協会
秋声会京都支部
琵琶芸術協会
秋声会理事長
牧秋静（南水）
〒604 京都市中京区西ノ京西鹿垣町一
電話〇七五（八四一）二九八九番

琵琶芸術協会
秋声会名古屋支部
秋声会副理事長
阿部秋子（しゅうし）
〒454 名古屋市中川区中島新町
中川住宅五ノ四〇一号
電話〇五二（三五三）〇二八四番

秋声会名古屋中央支部
秋声会理事
松浦秋翠
〒464 名古屋市千種区観月町二ノ三三
電話〇五二（七五一）九三三二番

秋声会名古屋城南支部
秋声会理事
長谷川秋楓
〒467 名古屋市瑞穂区中根町三ノ二七
電話〇五二（八三三）六七一七番

秋声会名古屋城東支部
秋声会理事
山本秋香
〒465 名古屋市名東区高間町三八一
電話〇五二（七〇二）一〇九三番

秋声会横浜支部
秋声会理事
宮原紅霞
〒226 横浜市緑区寺山町五一二
電話〇四五（九三一）五五七六番

舞見御中暑

筑前琵琶日本旭会
田中旭昇
〒653
神戸市長田区梅ケ香町一ノ一五ノ一四
電話〇七八（六七一）〇〇一八番

浜本旭好
〒678
相生市相生二丁目一四ノ一七
電話〇七九一（二二）五一一八番

正派薩摩琵琶
正調詩吟指南
最上穂洲
〒031
八戸市内丸十一
電話〇一七八（二二）八七七五番
……
九月二十三日於八戸市公民館ホール
薩摩琵琶八戸大会開催
正絃会連中岩手・青森両県同志
出演

洲楓会本部
家元　大舘美江子
〒156
東京都世田谷区八幡山二ノ一ノ一〇
電話　〇三（三二九）三五五〇番

筑前琵琶嶺派
嶺
青山旭子
旭蝶
〒810
福岡市中央区春吉二ノ八ノ二
電話〇九二（七六一）〇三二〇番

桝本旭風
〒537
大阪市東成区神路三ノ八ノ十八
電話　〇六（九八一）二二九一―四
（九七二）二七七八番

高千穂旭楓
〒544
大阪市生野区小路二ノ二六―二五
電話　〇六（七五三）〇三二五番
（七五一）〇六六七番

舞見御中暑

翠琵琶宗家
竹下翠風
〒194―01
東京都町田市金井町一六二ノ二八
電話〇四二七（三四）一一八八番

錦心流琵琶一水会本部副会長
同　埼玉支部顧問
花俣圭水
〒336
浦和市別所四丁目一ノ一五
電話〇四八八（六一）八〇一九番

大阪・吟水会
関川昌水
増田剛水
北村玄水
梶崩水
金寄靖水
小西甫水
会長　小川吟水
〒570
守口市緑町土居団地十一号
電話〇六（九九二）五六二五番

琵琶三美会
会長　矢吹旭美津
田中鵬水
桜井旭富
西村旭富
一坊寺旭清
篠原旭洋
外門人一同
〒601
京都市南区吉祥院中島町三〇ノ八九
電話〇七五（六九一）〇一二八番

筑前琵琶日本旭会
扶桑流詩吟教授
師範　若宮旭登
吟（桂水）
旭登会員一同
〒189
東京都東村山市美住町一ノ四
久米川公団九ノ二〇四
電話〇四二三（九一）九三二一番

高橋蘇水
〒042
函館市湯川町三―七―一五
電話　〇四二（五九）二四五三番
事業所
函館市大手町一六ノ一〇
電話　（二二三）四一五六番

押田旭窈女史賜盃の栄誉

筑前琵琶の元老押田旭窈女史は多年琵琶楽の振興発展に尽くされた功績により今春長き辺りから賜盃受賞の光栄に浴され心から御祝詞申し上げる。勿論これは押田女史の此の上ない栄誉であるばかりでなく、引いては我が琵琶界全般のためにも名誉なことで双手を挙ぱて祝賀の誠を捧げたい。

瀧の白糸

原田謙次作詞
飴谷六水作譜

なんのゆかりもない人を
因果な縁の糸車」
見込んだ男の遊学も
今となってはその月日時の早さが思われても
旅から旅へと小屋がけのしがない芸人の身ながらに」
男が東京に遊学の　学資ばかりか故郷の母に
心残りのないようにと　老母の暮しも事欠かさず
貢ぎ続けたこの三年

ふと見込んだは宿世の縁
めぐる月日も早や三年
めでたく卒業て故郷に錦
「わたしゃ水芸しがない渡世ぬしの学資をなんとせう」
所詮小屋がけの興行ゆえ　かせぎの出来るは春と夏
冬の長い北陸では　雪に埋れて興行ならず
月々欠かさぬ仕送りは並々ならぬ心中立て」
あと幾月かで遊学も　おえるというその幾月を
支える金の才覚出来　胸なでおろした虎の子を
無頼漢らに強奪され　かっとのぼせて取り乱し
平生の分別失った　心の乱れ身の乱れ
どこを通ってどうしたと　わからぬままの夢心地」
悪夢の中に血を流し　人をあやめた罪科を
裁かるる日の法庭に　判事と並び着座した
法服新しい検事代理　村越欽弥その人こそ
男まさりの白糸が　女ごころのやさしさを
傾けつくしたその相手　二人は顔を見合せて
心も空の憂き思い」　今、新任の村越が
初の法廷にまみゆる被告は　恩人なり、恋人なり
生涯共にと誓った人　男を見たる白糸は
〝ああ欽さま〟との　声を呑み込む身のつらさ
三年が間の心づくし　その甲斐あったと嬉しいが
それに引かえわが身の上　世に恐ろしい罪科の
調べを受ける恥づかしさ　水芸滝の白糸の
舞台姿は苟薬か　今はさすがに影うすく
思い出深き浅野川」　天神橋のかわらなる
黄色い花の月見草　義理のしがらみ情のきずな
水は淀んで流れもやらず　滝の白糸かすかにゆれて
今は絶えなんその響　検事代理の調べの結果
その罪死刑に該当すと　求刑すれば判事も認め
冷たい判決云い渡されたが　村越欽弥は恩人の
悲しき最期とげたる夜　己れもこの世さらばとて
恋人のあと追うてゆく』

吉井良三

絃を追う家に生まれし君なれば
舞台を変えて三代目継ぎしか
哀調の絃の調べに胸迫り
心情計りて眦の濡るる

琵琶のテープを聴く

自分の声が近ごろ思うように出ないのは、かぜでのどを痛めたせいもあるが追々声が落ちてくるのを感ずる。

テープ箱からテープを出してカセットによってプレイする。最近のものはやはり力が足らず、押しがなく、声に張りがなく、らくにすませてしまうので、変化と感動に乏しくてわれながら歯がゆい。

先生方、先輩のテープやラジオからの名演を聴いて見ようと意欲に燃えるが、時をおいて聞くのも楽しみの一つかと、テープの数々を分類し一覧表を作った。

さて静かに独りじっと耳を澄まして聴くと、発声、歌詞、節廻わしを通じて内容が明白で

しかも艶麗で情景がほうふつとし、崩れに至ってはクライマックスへと盛り上がって来る。更には演奏者の人柄まで伺われる。

テープの中に筑前琵琶、薩摩琵琶が納められてあるが、どなたのテープもみな鑑賞に価する。どんな曲目を、どんな舞台姿で、と思い浮かべることもまた楽しい。批評するなどとても出来るものではない。ただテープに耳を澄ませているばかり。楽しい鑑賞です。貴重なテープです。　五六、七、一（鴨水）

名古屋秋声会のゆかた会

六月十四日(水)昼名古屋市大須の中小企業福祉会館に於て開催。数氏の来賓を加えて出席者二十四名。人前ではじめて唄うという新人もあり、女性の多い秋声会はささやかではあるが華やかに和やかに会が進行し、夕食時にはビールも美味で隠し芸も続出、七時過ぎ楽しく散会した。蓬莱山ー山本、朝倉▼城山ー水野、近藤▼忠度ー土山紅美▼菅公ー小沢賢良▼春秋歌ー鬼頭紅春▼紅葉狩ー近藤紅鈴▼月下の陣ー若森紅葉▼白虎隊ー桑名紅静▼五條橋ー山本秋香▼河内の宿ー楊光子▼城山ー宮原紅霞▼湖水乗切ー小竹紅水▼会津の稚児桜ー長谷川秋楓▼河内の宿ー松浦秋翠▼須磨の浦風ー牧秋静▼川中島ー糸井悠水▼敦盛ー楊嶽水▼羅生門ー岸本港水▼終戦回顧ー西川磯水▼西郷隆盛ー丹野鯱水▼青葉の笛ー阿部秋子▼月下の陣ー前田秋声。

大阪堺大鳥神社琵琶献奏会

六月二十日(日)昼花菖蒲で賜う同神社で献奏。君ケ代ー島津旭栄、米原旭智▼扇の的ー多和綾子▼坂本竜馬ー辻旭城▼衣川ー石橋旭嶺▼岩壁の母ー小林旭備前▼湖水渡ー作花旭友▼茨木ー田中歓水▼伽羅の兜ー天津八千代▼二〇三高地ー中島旭穂。外に日舞、詩吟、民謡、奇術等数番。

京都琵琶協会六月例会

六月二十一日(日)昼本部平井会長宅。馬場鴨水、西川磯水、楊嶽水、田中歓水、梅原旭濤、山岡旭清、牧南水、水内媛水、平井春嶺、植村寛水各会員の外楊光子、岸本港水、高橋正雄の三氏列席。①臨時総会を開き会則一部改正ー第六章の内賛助会員の会費を金額五千円とする。②西川磯水氏の紹介で岸本港水氏正会員として入会。③楊光子、高橋正雄両氏賛助会員として入会。以上何れも承認決定。④七月例会は二十五日と予告したが都合により十二日に変更午後一時から三時まで本部で開催のあと洛北貴船の料亭右源太に席を移して懇親会開催に変更。以上協議一決の後研修演奏に移り楊光子女史の「河内の宿」を始め数氏演奏があり夕食を共にして七時半散会した。

日本芸術琵琶普絃会六月例会

六月二十一日(日)昼東京文京区大塚の貸席京屋で開催。異国の丘ー杉山富士代▼奥の細道ー鈴木好水▼詩吟二題ー奈佐喜八▼別れの盃ー佐藤旭尚▼詩吟二題ー田中銀水▼秋海棠ー坂入晴峰▼本能寺ー福島張水▼城山ー日比いね子▼鉢の木ー青木早水▼由比ケ浜ー若宮旭登▼敦盛ー杉山旗水▼八甲田山ー日比二水▼五條橋ー内山啓昭▼秋風故郷山ー金森旭弾▼景清ー高田栄水。以上研修演奏について長谷川錦舟より批評あり六時半散会。七月は十九日同所に於て開催の予定。

琵琶を愛する会演奏会

六月二十一日(日)昼新潟三栄会館、後援一水会新潟支部ほか。壺坂寺ー加藤とよ子、岩根和香▼村上喜剣ー後藤学水▼道成寺ー阿部妃水▼井伊大老ー五十嵐雅水▼本能寺ー鈴木柳水▼湖水乗切ー村田知水▼石童丸ー後藤甚水▼舟弁慶ー時田翠水▼茨木ー加藤友水▼伊豆の御難ー結城越水▼河中島ー戸田頌水▼西郷隆盛ー野崎星水▼木村重成ー東京座間蛟水▼盛綱先陣ー東京水藤五朗。外に詩吟八題。

第十三回琵琶演奏会

浜松の薩摩琵琶鶴絃会では六月二十八日(日)正午より、浜松市民会館大ホールにて首記演奏会を開催した。

この会場は一五〇〇名収容の大ホールゆえ聴衆の入りが心配されたが、ゲストとして迎えた京都の平井春嶺師、名古屋の阿部秋子師、静岡の岡尾鶴城師の名声と、浜松吟詠連盟の方々の応援出演、更に剣詩舞諸氏のご加勢もあり、加えて梅雨期の最中にもかゝわらず、この演奏会を祝福するかの如き快晴に援けられ、大入り満員にて、浜松の演奏会初まって以来の盛会で主催者鶴絃会の一同は嬉しい悲鳴をあげていた。

プログラムは詩吟が十六番、剣詩舞が二番、琵琶舞が二番、鶴絃会諸氏の琵琶弾奏が十四番、そして来賓の琵琶は阿部秋子（須磨の浦風）、岡尾鶴城（城山）、平井春嶺（その日の東郷大将）と続き、会主の小野鶴彦（湖水渡り）が最後を締めくくり。鶴絃会有志によ